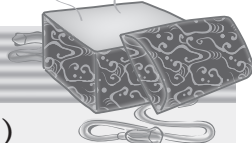


日本人学校・補習授業校 タマテバコ

トビラを開けたら、いろんなものが見えてきた……



アメリカの補習授業校 インタビュー調査報告(1)

AG5委員 首都大学東京 国際センター准教授 岡村 郁子

AG5ではダラス補習授業校にご協力いただき、カリキュラムや教員研修プログラムの開発を進めることになっています。並行して、アメリカの補習授業校の現状把握とニーズ調査のために当地の6つの補習授業校を巡り、校長・副校長、運営委員、保護者や生徒の皆様インタビューを行いました。ご協力を快諾いただいた学校のうち、ワシントン、コロンバス(OH)、クリーブランドの各補習授業校を渋谷真樹委員と訪問して参りましたので、報告いたします。



ワシントン日本語学校 (ワシントン補習授業校)

当校は一九五八年に創立された、

世界でもっとも歴史ある補習授業校です。幼児部から高等部まで七〇七名が学ぶ大規模校で、二〇〇五年には日本語を継承語として学ぶ継承語学校と分かれたために在籍者数が四〇八名に減少しましたが、二〇〇五年以降は増加の一途をたどっています。ワシントンD・Cという大都市には塾もありますが、なぜ補習授業校が選ばれ続けるのでしょうか?

その理由の一つが、日本の代表としてコミュニティの行事に参加するという、補習授業校ならではの経験だと考えます。毎年四月最初の土曜日に開催される「さくら祭り」。佐藤良明校長先生は、今年度から中学三年と高校生を全員参加とし、翌日曜日を振替授業日としました。前年度から準備を開始し、展示や日本の伝統的な遊びの紹介などの活動を行います。ほかにも正月の新春祭りへの参加など、児童生徒に日本人コミュニティの一員であることを自覚させ、日本文化に誇りを持たせることを目指しています。

今年度のもう一つの改革に、授業時程の変更があります。これまで午前二時限、午後四時限であった授業

時程を保護者に説明会やアンケートを通して理解いただき、午前四時限、午後二時限に変更しました。この変更により放課後にサッカークラブを発足させ、域内の他国(仏・独・亜)の補習校とのリーグ戦も予定されています。ほかにも琉球太鼓、百人一首、チアダンスなどの活動があり、教室を貸すことでフアンドレイジングにもつながっています。

授業では、漢字の数が一気に増える国語科の「三年生の壁」を乗り越えるために、二〇一四年度より小学三年から五年まで、国語科にコース制を導入しました。Aコースは学習言語としての日本語が不十分な子どもたちが、ゆっくり学ぶコースです。担当の中村慶子先生に、手づくりのワークシートやゲーム感覚で学べる教材を見せてもらいました。Aコースに入っても家庭でのサポートはよりしつかり行い、差が広がらないようにフォロワーが必要とのことですが、モデルとなり得る取り組み事例だと思います。理科学習では、理科の専任が平日に事務局で準備し、授業日に担任教師とともに観察・実験等を実施。また高等部の卒業生がクラスのアシスタントに入るシステムも人気があります。これは大学のサービ

語力の保持にもつながっています。ワシントンでは保護者をはじめとする豊富な人的資源を活かしたイベントも積極的に行われています。たとえば日系の大手航空会社のパイロットによる講演会やスミソニアン博物館での特別授業、ナショナルオーケストラの団員による演奏会など、枚挙にいとまがありません。また、図書室は借用校の二階建ての建物をまるごと使った魅力的な空間で、一万五〇〇冊の蔵書を誇ります。このほかにも電子黒板などすべての教材の使用を許されているという借用校との関係の良さも、教育環境の整備につながっていると感じました。

コロンバス(OH)日本語補習校 (コロンバス(OH)補習授業校)

オハイオ州には五つの補習授業校による「オハイオ州補習校教育改革連絡会」があり、相互に情報共有をしながらより良い補習校づくりを目指しています。当校は、児童生徒数がその中で最大の約五五〇人(全米でも九番目の規模)、「共に学ぶ心」を教育理念とする幼稚部から高等部までの「保護者立」の学校です。

保護者から立候補または推薦された理事十六名と派遣教員二名の計十八名で構成される理事会はいわば教

育委員会のような組織で、学校の管理・運営、教員採用、教育方針の設定、評価（自己評価）等を担っています。これらのノウハウのすべてが「教員用ハンドブック」に掲載され、誰もがすぐに授業ができる状態になっていることに驚きました。授業時間が少ない状況では、詰め込みではなく指導の密度を上げる必要がありますが、教員と理事会の協働により、現在デジタル教科書などICTの活用に取り組み始めているそうです。

さらに当校の大きな魅力の一つに、泊りがけの修学旅行があります。引率も保護者が協力する等、すべての運営に保護者の力が欠かせません。一方、教員研修の試みとして特筆すべきなのは現地校に向いての教員研修です。優れた実践を行っている現地校の先生の授業に生徒として参加し、自尊心を大切に指導や対話的で主体的な授業等を体験しています。また代講教員を手配することで、担任を持つ教員でも補習授業校内の授業を相互に見学する機会があるとのことでした。

オープンハウスには子どもたちが通う現地校の先生方を招待し、書初めなどを披露します。藤井良一校長先生によると、中高生対象のアンケートでは補習授業校生も現地校生も

約八割が楽しいと答えており、こうした交流が奏功しているようです。

ほぼ九割の児童生徒が帰国するものの滞在が長期になる場合が多いため、クラス内の日本語力には差が大きく、ここでも家庭でのサポートが必須とのお話がありました。また、当地には地方に帰国する方も多く、編入学への不安の声（受け入れ校が限られている等）も聞かれました。

クリーブランド日本語補習校 (クリーブランド補習授業校)

当校は日本からの派遣教員がいない小規模校で児童生徒数は八十七名。二〇〇三年から校長を務める斉藤美子先生をはじめ、教員の多くが在校生や卒業生の保護者で、熱意を持ち一丸となって教育に当たられています。そもそも補習授業校は赴任家族が自らの子どもたちの日本語学習のために設置した手づくりの学校だったことを彷彿とさせます。

駐在員家庭の子どもが七割を占めますが、うち長期滞在者が四割、帰国予定者が三割程度とのことでした。常駐の事務局がなく、一年交代の運営委員会が文字通り学校運営の要となっっています。

授業も見学させていただきました。幼児部では秋の風物詩・お月見のテ

ーマ学習です。お父さんやお母さんといっしょにつくったお月見モビールを手に浴衣や甚平姿で記念撮影をした後は、保護者お手製の美味しいお団子に大歓声！小学四年のクラスでは自作のポスターを示しながら発表し、それを子どもたち自身が撮影、それを見ながら目標通りにできたか感想を言い合います。小学五・

六年は合同で十一月の学習発表会の練習中。小学部は低学年では十名程度ですが、高学年から中等部では少人数で、丸テーブルを囲んで授業をしているクラスもありました。

当校の特徴の一つに「国際部」があります。日本語に興味のある人を対象に、「国際部Ⅰ」では日本語テキストを使って初歩を学習、「国際部Ⅱ」では日本に住んだ経験のある人や学校で日本語を勉強した人が集まって中学校の教科書で学び、補習授業校の地域貢献に一役買っています。熱心な読書指導も特徴の一つです。

蔵書数は四〇〇冊に上り、毎年夏休みの宿題として全員が読書感想文を書きます。二〇一四年には青少年読書感想文全国コンクールで学校賞を受賞しました。永住家庭の子どもも多いですが、校長が日本語力を厳しく見極め、宿題の確認をはじめ保護者のサポートを入学前に誓約さ

せる姿勢が、教育レベルを保つうえで大いに役立っているようです。

訪問を通して、いくつかの共通する課題が見えてきました。一つは「全教員が使いやすい教材教具の提供」。補習授業校の先生は平日に仕事を持っている方も多く、授業準備を短時間で効率的に行う必要があります。

手づくりされているルビつきの教材やワークシート等は汎用性の高いものを提供できればと感じました。また社会科で扱うトピックは海外ではイメージしにくいことが多く、豊富な資料をハンディに扱えるデジタル教科書などが有効でしょう。二つ目は「無理なく授業を進めるための年間計画や指導案の開発」。限られた時間で学ぶ児童生徒のニーズに合わせたメリハリのある指導用マニュアル、指導案集の提供が求められています。三つ目は「教員研修のプログラム開発」。どの学校でも教員研修を工夫して実施されていますが、特に初任者用マニュアルや映像資料のようなものへの要望が多くありました。

以上、今回訪問させていただいた学校の現状はそれぞれ特色がありますが、さまざまなニーズにお応えできるように、AG5プロジェクトを強力に推進して参りたいと思います。